

～ たったひとり、農業に飛び込んで半世紀。～

地域の水田作の担い手として、効率的な営農を目指す。

服部農園有限会社（大口町）

水田作、露地野菜（水稻、大麦、キャベツ、ブロッコリー、野菜苗）

【平成21年4月30日掲載】

大口町は愛知県の北西部の岐阜県境に位置し、木曾川が運んだ肥沃な沖積土壌の農地が広がる水田作や露地野菜栽培が盛んな地域です。名古屋市に近く、都市化が進んでいますが、都市近郊ならではの消費地に近いという立地条件を生かし、特色ある農業が営まれています。服部農園有限会社は、経営者夫婦、後継者、社員2名からなる農業法人で、大口町における土地利用型農業の重要な担い手として大規模水田作を主体とした経営を行っています（写真1）。特に大麦栽培では地域をリードする存在で、排水対策などの基本技術の励行により安定した生産を続けており、平成20年度麦作共励会において東海農政局長賞を受賞されました。



写真1 服部農園有限会社のみなさん

前列向かって右から社長の服部靖宏さん、奥様の服部起代子さん
後列向かって右から社員の高須さん、後継者の服部忠さん
社員の武市さん

1 たったひとりで農業の世界へ

社長である靖宏さんは農業後継者として親の経営基盤を引き継いだのではないそうです。中学校を卒業したばかりの15歳の春、たったひとりゼロからの出発で農業を始め、現在では大型機械を駆使し、社員を擁する地域でも屈指の経営体になっています（写真2）。生家はいくらかの農地を所有していましたが、お父さんは勤め人だったそうです。小学6年生の時にお父さんが亡くなり、その時点で「中学校を出たら働いて自立しよう」と

心に決めていたそうですが、どうせやるなら他人に使われる職業よりも自分自身の力で切りひらいていく仕事に就きたいと考え、農業を選択したそうです。「若くして働き始めたから、農業を続けて50年にもなるよ」と、当時を振り返ってくれました。最初は、露地野菜栽培からのスタートでした。やがて高度経済成長時代を迎え、気候の温暖な太平洋側の地域で施設園芸が盛んに行われるようになり、靖宏さんもビニルハウスを建ててキュウリやナスの栽培に挑戦しました。最初のビニルハウスは、自宅近くの竹藪から切り出した竹を割って切りそろえ、地面に突き刺して竹幌としたものにビニルを掛けるという手作りのものだったそうです。



写真2 服部農園の営農を支える大型機械（上）
倉庫兼作業場（下）

2 水田作へのシフトがターニングポイント

靖宏さんが本格的に水田作に取り組み始めたのは、日本の農業政策が食糧増産から生産調整へと180度転換した昭和40年代の中頃でした。水田作への転換の理由を尋ねると「こまごまとした園芸農業よりも性に合っていたからね」と笑って答えてくれました。それ以前から、集約的な野菜栽培から水田作へと軸足を移しつつありましたが、水田作主体となるきっかけは、大口町内で農地基盤整備事業が行われ、町役場が先頭に立って集団転作を強力に推進するようになったことでした。その頃には地元でも名の通った若手農家であった靖宏さんのところに、次々に耕作の依頼が舞い込んだそうです。集団転作ほ場を引き受ける際には、部分受託は極力避け、利用権設定にこだわったそうです。農耕技能を部分的に提供するという考え方ではなく、あくまでも水稲や大麦を栽培して出荷することにこだわったのは、いわば農家としての誇りがあったからでしょう。利用権設定や耕地の集積のために、夜遅くまで1軒ずつ地権者を訪ねて頭を下げて歩く大口町役場の職員の熱い仕事ぶり

が記憶に残っているようで、「まだ若造の農家だったけど、役場の人にはかわいがってもらったね。今でも感謝している。」と当時を振り返る言葉が印象的でした。その後、水田作農家として着実に生産を拡大し、現在では水稲29 ha (写真3)、麦茶の原料となる六条大麦24ha、秋冬露地野菜 3 ha (写真4) の農業経営を実現していきました。



**写真3 服部農園の水稲生産
(上から、立毛、収穫作業、製品)**



**写真4 水稲と組み合わせる六条大麦と
秋冬露地野菜（キャベツ）**

3 後継者が安心して経営できるように

現在では養子縁組した娘さんの夫である忠さんが、頼れる後継者として経営の一翼を担ってくれるようになりました。年間の大きな段取りを伝えれば、それぞれの仕事の細かい部分は忠さんが進めてくれるそうです。「考えてみれば50年もこの仕事をやって来たんだし、そろそろ一線を退いてもいい頃かなあ」と言いつつ、「同年代のツレはみんなまだまだ現役だし、70歳を過ぎても仕事は続けるつもりでいる。采配は息子に任せても、生涯現役で手助けしてやりたいね」と語ってくれました。靖宏さん、起代子さんご夫婦としては、この先5年くらいの間には忠さんに経営を引き継いでいきたいと考えておられます。そのためには、自分たち世代の総仕上げとして、忠さんが無用な不安を感じることなく跡を継いでくれるように、よりしっかりした経営基盤を整えたいと話してくれました。特に、年間を通じた仕事量の変化をさらに抑えていくことが重要な課題であると捉えており、柔軟な発想による事業展開が重要だと考えておられます。例えば、水田作へ本格的に転換した頃から手がける種苗会社からの委託による夏野菜の苗生産は、秋冬露地野菜の収穫と春以降の水田作の繁忙期

の間を埋める重要な部門となっています(写真5)。また、社員をもう1名増やしたいと考えておられ、目下求人中とのことです。今後はさらに、年間を通じた作業量の平準化を目指し、総生産量を増やすことで収益を向上させていきたいと語ってくれました。



写真5 服部農園の秘密兵器である夏野菜の苗生産

取材協力：尾張農林水産事務所 農業改良普及課

Copyright © 2009, Aichi Prefecture. All right reserved.